

教育現場から聞こえてくる これからの教授法

—教授法分科会序文—

堀 歌子
早稲田大学国際部

1. はじめに

日本語教育の現場を取り巻く諸問題の中でも教授法の問題は常に大きな位置を占め、時代と共に揺れ動いて来た。特に日本語教育の基盤となっている外国語教授理論のさまざまな変遷は各時代の現場に携わっている教師に大きな影響を与え続け今日に至っている。なかでも1950年代に登場し、世界的な指示を得ていたオーディオ・リンガル・アプローチ(Audio-Lingual Approach)が1960年代後半から70年代に強い批判を受けてその地位を失って以来外国語教授理論は一般に混迷の時代を迎えたとも言われた。その間オーディオ・リンガル・アプローチに取って代わる教授法が求められ、次々と新しい外国語教授法が提唱された。

このような時期においても日本語教育ではオーディオ・リンガル法が教授法の中心的存在であり、とりわけ文型練習(Pattern Practice)に代表される機械的な口頭練習は初級段階の教室活動として主流をなしていた。

しかし1970年代後半から盛んに唱えられてきたコミュニカティブ・アプローチ(Communicative Teaching Approach)は日本語教育現場に新しい風を吹き込んだ。今までの文型・文法構造に依存していたシラバスの見直しをはじめ、文の機能を重視した捕らえ方、そして単調な繰り返しによるパターン練習の反省から現実のコミュニケーションにより近づくためのタスク化した練習方法が教室活動に加えられるようになってきた。

その一方では心理学者や精神医学者の考案によるカウンセリングや心理療法を取り入れたサイレント・ウェイ(Silent Way)、サジェストペディア(Suggestopedia)、C L L (Community Language Learning)や動作と言語習慣を結び付けたTPR (Total Physical Response)などに代表される新しい教授法がいろいろな機関で実験的に行われるようになった。また多くの教師が新しい教授法を使った授業をワークショップなどで体験したり、VTRを通して見たり、その他資料や情報が豊富に人手しやすくなった現在、日本語教育にこれらの外国語教授法を応用する傾向は一層の強まりを見せている。

しかし一般的に疑問に思われることは、ほとんどの機関では直接法に基づく文法・文型の積み上げ式による教科書を使用していると推測される。その場合教科書を変えずに各自が信じる教授理念にあった外国語教授法もしくは指導技術を学習過程のどの部分で、どのように、どの程度導入したら学習効果が上が

るのかということである。

これらの問題を踏まえて教授法の分科会では昨今の外国語教授法を日本語に応用する場合、留意しなければならない問題点は何か、また教科書と教授法との関係はどのように考えたらよいのかなど、現場の教師が抱えている疑問点を探り、解決の糸口を引き出そうと試みた。また簡単ではあるが、少しでも現状を知る手掛かりを求め、教授法分科会出席者にアンケート調査の記入をお願いした。

2. 教授法分科会出席者に対するアンケート結果の集計

以下は教授法分科会の出席者を対象にアンケート調査を試みた結果である。途中他の分科会との関連により出席者の多少の移動はあったが、51名の方から回答があり、有効回収率は63.75%であった。

- ・ 表中の数字は人数、()内の数字はパーセントを表す。
- ・ 円グラフ内はパーセントを表す。

2.1 出席者の背景

1) 年齢

| 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代以上 | 無回答 | 計 |
|---------|----------|-----------|-----------|---------|---------|----|
| 1(1.96) | 9(17.64) | 18(35.29) | 18(35.29) | 4(7.84) | 1(1.96) | 51 |

2) 性別

| 男性 | 女性 | 無回答 | 計 |
|----------|-----------|---------|----|
| 7(13.72) | 43(84.31) | 1(1.96) | 51 |

3) 日本語教育

a. 現在日本語を教えているか

| はい | いいえ | これから教えるつもり | 計 |
|-----------|---------|------------|----|
| 46(90.19) | 3(5.88) | 2(3.92) | 51 |

b. 教えている機関

| 個人 | 日本語学校 | 専門学校 | 大学 | 大学院 | その他 | 計 |
|---------|----------|---------|-----------|---------|----------|----|
| 4(8.69) | 19(41.3) | 2(4.34) | 10(21.73) | 3(6.52) | 8(17.39) | 46 |

その他(区の日本語教室、高校、交流基金派遣、国際協力サービスセンター)
(教えていない人、これから教えるつもりの人、計5人は総数に含まない)

c. 経験年数

| | | | | | | | |
|----------|----------|----------|-----------|---------|---------|---------|----|
| 3~5年 | 6~8年 | 9~11年 | 12~15年 | 16~20年 | 20~25年 | 26年以上 | 計 |
| 9(19.56) | 8(17.39) | 9(19.56) | 15(32.61) | 3(6.52) | 1(2.17) | 1(2.17) | 46 |

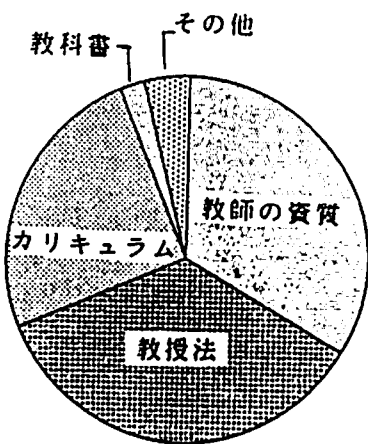
2.2 言語習得に一番影響すると思うもの

| | | | | | |
|-----------|-----------|--------|---------|---------|----|
| 教師の資質 | 教授法 | カリキュラム | 教科書 | その他 | 計 |
| 16(33.33) | 17(35.41) | 12(25) | 1(2.08) | 2(4.16) | 48 |

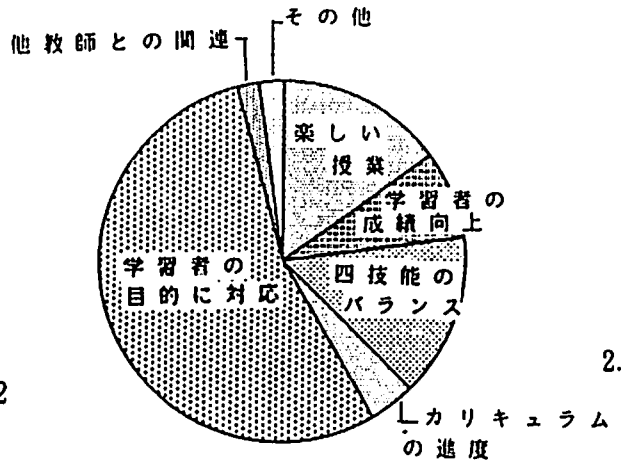
(これから教えたいと思う人2名の回答を含む。教えていない人は総数に含まない)

2.3 授業で一番心掛けていること

| | | | | | | |
|----------|----------|----------|-----------|-----------|---------|---------|
| 楽しい授業 | 学習者の成績向上 | 四技能のバランス | カリキュラムの進度 | 学習者の目的に対応 | 他教師との関連 | その他 |
| 7(14.58) | 4(8.33) | 7(14.58) | 2(4.16) | 26(54.16) | 1(2.08) | 1(2.08) |



2.2



2.3

2.4 教授法について

1) 教えている機関で教授法は決められているか

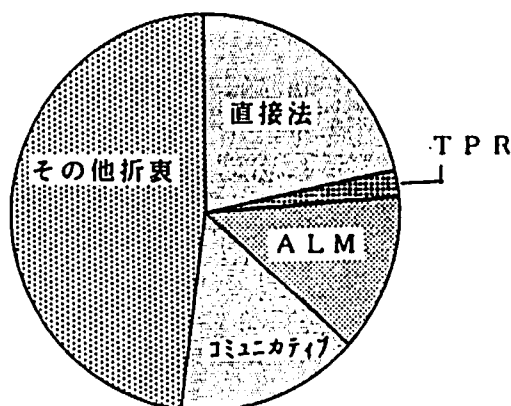
| | | | |
|--------|-----------|---------------|----|
| はい | いいえ | 基本的にはあるが教師に一任 | 計 |
| 4(8.7) | 16(34.78) | 26(56.52) | 46 |

2) 決められた教授法と自分の教授理念は同じか。1)の「はい」の人のみ

| | |
|--------|---|
| はい | 計 |
| 4(100) | 4 |

3) 使っている教授法

| | | | | | |
|-----------|---------|----------|----------|-----------|----|
| 直接法 | TPR | ALM | コミュニカティブ | その他折衷 | 計 |
| 10(21.74) | 1(2.17) | 6(13.04) | 7(15.22) | 22(47.82) | 46 |



4) 取り入れたい教授法(複数回答) 回答者31名

| | | | | | | |
|----------|--------------|---------------|---------|-------------------|-------------|---------|
| TPR | サイレント ウェイ | サジェスト ペディア | CLL | コミュニカティブ アプローチ | ヴァルネ トナル | 全て |
| 8(17.39) | 3(6.52) | 1(2.17) | 7(15.2) | 14(30.43) | 3(6.52) | 1(2.17) |

2.5 教授法に関するコメント部分から(現在抱えている問題点)

- ・ 構造シラバスの教科書を使いながらコミュニカティブにする方法
- ・ 多様化する学習者に最近の教授法を見つけるむずかしさ
- ・ うわべだけの折衷でいいかどうか
- ・ 漢字圏と非漢字圏とが同じクラスにいる場合の教授法
- ・ 教師、生徒に共通の媒介語がない場合の教授法
- ・ 初級を直接法で教えるときの教材が現実の会話から遠い
- ・ 直接法の限界をいかに越えるか
- ・ 学習者に最適な教授法を使っているかどうか
- ・ 理論ではわかっている新しい教授法を使いこなせない
- ・ 日本人と外国人を同時に教師として養成する場合の教授法

3. 分析結果の要旨

出席者の背景を見ると40代から50代の教師が全体の70%を占め、そのほとんどが女性である。教えている機関は日本語学校が41%と多く、次いで大学が21%、その他個人、大学院、専門学校、高校などいろいろな機関からとなっている。経験年数では半数以上が9年以上の日本語教授歴を持ち、一番多かったのは12～15年で、また26年以上と答えた人も1人いた。

次に言語習得に一番影響すると思われるものについての質問では、やはり教授法と答えた人が多く、次いで教師の資質、カリキュラムの順であった。

授業で一番心掛けていることに関しては、58%強の人が学習者の目的に対応することと答えており、学習者中心の教育を目指していることが伺える。教授法に関しては、教えている機関で厳密に教授法が決められているところは少なく、ほとんど決められていないか、または基本的にあっても教師の選択に任されているということである。

現在使用している教授法は折衷しているという答えが一番多く、次いで直接法、コミュニカティブ、オーディオ・リンガル法、TPRの順で、サイレントウェイ、サジェストペディアを使用していると答えた人はいなかった。

折衷していると答えた人の中では、直接法とコミュニカティブ、直接法とオーディオ・リンガル法といった組み合わせが全体的な傾向であり、単独では使われていない対訳法もわずかではあるが折衷式教授法の中で使われていることがわかった。また今後授業に取り入れたいと思う教授法の上位に挙げられたのはコミュニカティブ、TPR、CLLであった。

簡単なアンケート調査ではあったが、今後も新しい教授法に目が向けられて行くことが伺え、またコメント部分からもそれらの導入を巡って心を砕いている様子が見え興味深い結果が得られた。

4. 終わりに

以上アンケート調査結果からも明らかなように日本語教育の現場では教授法の折衷化時代に入っているといえよう。このことは大まかに言うと二つの流れを意味しているように思われる。ひとつは従来 of 文法シラバスによる積み上げ式の良さを基本的に進めながら、同時に会話運用能力(Proficiency)を伸ばすための機能・タスクを重視した練習、さらにシュミレーション、プロジェクトワークなどの活動も幅広く利用しようとする方向である。もう一つはコミュニカティブ・アプローチに代表されるような新しい教授法で授業を進めながら、そこから考えられる反省点すなわちコミュニケーション能力の養成を目指すあまり正確さが犠牲になってしまっているのではないか、またタスク教材だけで読み書きを含めた真の言語能力がつくのだろうかなどという疑問から言語形式

にも注意を向けて行こうとする方向である。

これら二つの流れはアプローチは違っていても、ある部分ではお互いの有効性は認め、補い合う形となっている。そして私見ではあるがその延長線上にある目指すところはACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Languages)の言語能力基準の基本概念(詳説は日本語教育61号、牧野 1987)に一致するのではないだろうか。すなわち自然な言語環境における

- 1) 機能・タスクの重視 (言語をコミュニケーションの道具と考え、それを使って機能的にどういうことができるか)
- 2) 場面・話題の重視 (どういう人がどのような内容、話題で話しているか)
- 3) 談話の型の重視 (どういう談話の型で話しているか)
- 4) 正確さの重視 (文法、語彙、発音、文化・社会言語学的要素、会話運用能力、流暢さはどうか)

以上の4つの大きい柱を総合的に判断するACTFLの能力基準は、単なるOPI(Oral Proficiency Interview)と呼ばれるインタビューによる会話能力テストの判定方法の基準というだけではなく、これからの理想とする教授法を考えると、必要な要素になるであろうと思われる。

参考文献

- ACTFL, NY. (1989) THE ACTFL ORAL INTERVIEW Tester Training Manual, ACTFL
Omaggio, Alice C (1986) Teaching Language in Context, Heinle & Heinle.
鎌田 修 (1990) 「日本語教育」71号、44-55
高見澤孟 (1989) 「新しい外国語教授法と日本語教育」アルク
田中 望 (1988) 「日本語教育の方法」大修館
土屋澄男 (1990) 「英語科教育法入門」研究社
縫部義憲 (1991) 「日本語教育学入門」創拓社
堀 歌子 (1991) 「日本語教育国際セミナー論文集」73-77 華中理工大学
牧野成一 (1987) 「日本語教育」61号、49-62